

熙寧六年（一〇七三年） 38、 新城附近での作。いずれも時政を強く諷したものであることは、のち烏台詩案で蘇軾みずから明言する。

山邨 さんそん

五絶

其二

烟雨濛濛雞犬聲

烟雨濛々として 雞犬の声あり

有生何處不安生

有生 何れの処にか 生を安んぜざる

但令黃犢無人佩

但だ 黃犢をして人の佩ぶる無から令めば

布穀何勞也勸耕

布穀 何んぞ勞せん 也た耕を勸むることに

【語句】 ○山邨：邨は村に同じ。○鶏犬声：平和な農村のさま。老子の第八十章に「鄰国相望み、鶏犬相聞こゆ」陶淵明の桃花源記に「阡陌交通し、鶏犬相聞こゆ」○有生：この世に生をうけたあらゆるもの。○黄犢：子牛。襲遂のことは漢書の本伝にみえる。このことを借りて、当時、私塩を売るものが刀や棒を帯びて横行していたことを言い、朝廷の塩法がきつすぎて勝手が悪いことを諷した、という。○布穀：郭公、どちらの字を当てても、鳴き声の擬音。布穀はさらに、「穀を布せ（種をまけ）」と春に鳴くという意をも当てている。

【解釈】きりさめにぼおつとけむつた農村から、鶏の声、犬の声が聞こえてくる。生きとし生けるもの、この世のいづくにとて、その生に安んじえぬ所がある。 (むかし 襲遂は渤海太守となり、農民が腰にたばさむ刀剣を売らせて子牛を買わせたことがある。だから今も) 百姓の中に子牛を腰に佩びているようなものを、いなくさえすれば ながらも郭公にご苦勞ねがって、農耕を勧めて鳴いてもらうこともなかりうに。

同

其三

老翁七十自腰鎌

老翁 七十 自ら鎌を腰にす

慚愧春山筍蕨甜

慚愧す 春山 筍蕨の甜きを

豈是聞韶解忘味

豈是れ 韶を聞いて 解く味を忘るるならんや

邇來三月食無鹽

邇來 三月 食に塩無し

【語句】○慚愧：慚も愧も恥ずかしく思うこと。しかし俗語としては、ありがたく思う気もちをふくめて、なんとまあと嘆ずる感嘆詞。○聞韶：孔子は斉で舜の音楽である韶を聞いて、三月の間、肉の味を忘れるほど感動した。論語の述而篇に「子 齊に在りて韶を聞く。三月 肉の味を知らず。曰く、凶らざりき、樂を為すの斯に至らんとは」

○解：能とほぼ同じ。○邇来：邇はクそのクと指し示すことば。それよりこのかた。夜来といえは昨夜よりこのかた。○無塩：この詩も王安石が塩の密売を嚴重に取り締まったために、末端の貧民がかえってまるで塩をなめられなくなっている実情をうたった。

【解釈】七十歳になる老いた農夫が、鎌を腰に差して出かける。なんとまあ、春の山の筍や蕨のおいしいことは！

といって、あの孔子さまのように、韶の音楽を聞いて感動のあまり、肉の味も分からなくなっているのではない。それどころかこの三ヶ月というもの、まるで塩気なしの食事が続いているのだ。

同

其四

杖藜裏飯去忽忽

杖藜 飯を裏んで 去つて忽々

過眼青錢轉手空

眼を過ぐる 青錢 手を転ずれば空し

贏得兒童語音好

贏ち得たり 兒童 語音好きを

一年強半在城中

一年の強半は 城中に在り

【語句】○忽忽：あわただしいさま。○青錢：青銅の錢。每春、稲がまだ青いときに人民に錢を貸与し、秋のとり入れのときに利息をつけて政府に返させた。この詩は熙寧二年に王安石が始めた青苗法を刺る。○贏得：贏はもうけ、余り。得がつくのは口語的な言いかたで、得は上の動詞の働きを補う。かち得る。○強半：中国古代の数学で 3/4 を強半。1/4 を弱半といった。大半の意。ク一年強半クの語がこの詩で知られる。

【解釈】藜をつえつき おむすびをつつんで（青苗錢を受け取りに）せかせかと街へ出かけたものの、お金はちらっと眼にうつただけで、たちまち他人の手に渡ってしまっ、あとは何も残らなかつた。もうけものとなつたのは、子どものことばが上品になつたことぐらい。それもそのはず、一年の大半を街で暮らすのだから…。

「蘇軾」近藤光男より抄出